

「6・12デッチ上げ事件」茅ワ回公判「開かれる(6/3千葉地裁)」
三里塚・ジェット闘争貫徹、「国鉄35万人体制」粉碎!

嶋田・斎藤「証言」のデマ性を突き出した佐藤「証言」

日刊
動労千葉

82・6・7

No. 1063

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五〇六(公衆)四三三二七二〇七

六月三日十三時、千葉地裁において、「六・一二告訴事件」第七回公判が開かれ、検察側証人・佐藤次男(前動労仙台地本書記長)に対する弁護側反対尋問と、山田亘君の反対尋問が行われた。

激減した「本部」動員者

強い雨と風という悪天候をものともせず、六枚の傍聴券獲得のため深夜から裁判所南口に陣取って闘った組合員が出迎えるなか、各支部から結集した一五〇名の動員者が裁判所正面入口に到着した。

今では、警察権力に守られた裁判所では見ることができなくなった動労「本部」革マルは、なんとまっすぐ自治会館に逃げこみ、十二時五十分になってようやく嶋田誠、斎藤(吉)、野口ら十名の傍聴者だけであらわれた。なかでも、公判のたびにうきほりとなるデッチ上げ性と、反労働者の方針ゆえに、動労内外の批判をあびて消耗感を深める革マル分子・嶋田誠は、精一杯のつくり笑いも顔がひきつり、ついに得意の権力の前での「Vサイン」もやる気力をなくしてしまったのである。

佐藤「証言」にあせる佐々木検事

公判における佐藤次男に対する反対尋問のなかでの「証言」は、これまでに展開されてきた嶋田・斎藤の「証言」と全く食い違い、デッチ上げ性が暴露された。

第一に、斎藤(吉)は、「片岡が大きな声で嶋田をつかまえろ」といったとデマ証言してきたが、佐藤は「そんな声はきかなかった」と証言した。第二に、佐藤は、嶋田を取り囲んだ人物の特定についても「わからない」と証言した。

これにあわてた佐々木検事は、傍聴者を指さし「この中に暴行を振った奴はいないか」などと、無理やり特定させようとしたのである。

同じように、山田君に対しても同様の発言をしたが、法廷にたった山田君は、自分が現在動労千葉の組合員になったのは何故か、を証言した。

そして、動労「本部」組合員である時に、「千葉動労はどうしようもない組合とか、デタラメな組合と聞かされたが、来てみると千葉動労は真面目で、「本部」のいっていることがデタラメであることがわかった」ので、自分は、動労千葉に加入したと、はっきりと証言した。

消耗感を深める嶋田・斎藤(吉)

このように、嶋田、斎藤らのつくりあげたストーリーが次々と破綻し、デッチ上げ性があらわに



得意の権力の前での「Vサイン」も消え失せ、地裁をとりまく怒りのシュプレヒコールに、傘をふり上げ、無理して虚勢をはって見せるデッチあげタレコミ分子=革マル嶋田。
公判が進行するたびに、デッチ上げ「ストーリー」が破綻してゆき、「本部」組合動員者も激減。消耗も無理ないところ。



権力と完全に一体化して、「デッチ上げ告訴」路線を定着化させている「本部」革マルを激しく弾劾！ますます公判のため毎々、意気上る動労千葉。(6/3地裁前、150名の動員者)なり、意気消沈した動労「本部」革マルは、動労千葉の動員者のシュプレヒコールを浴び、うなだれて帰っていった。

篠塚君からの固い決意表明

教育会館での総括集会は、弁護団を代表して、市川弁護士から法廷闘争の報告をうけ、「勝利をかちとるために今後とも圧倒的な傍聴動員を」との要請をうけた。不当にも起訴された三名を代表して篠塚君から、悪天候にもかかわらず多数の傍聴に対する御礼がのべられ、「本日の証言を聞いてますます勝利を確信することができた。」「まさに百パーセントデッチ上げが満天下に明らかとなった。」今後法廷の中でトントン嶋田・斎藤(吉)のデッチ上げを粉碎して、勝利まで闘い抜く。」と固い決意表明がされた。第二臨調攻撃と対決し、戦闘的労働運動復権のために「六・五労働者集会」の圧倒的な成功と、今後の公判闘争を最後まで闘い抜くとの力強い報告をうけ終了した。

次回公判 六月二二日 十三時
全力動員を訴えます。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ!